

(英語) 傾向と対策

傾向

正誤問題・文法語法・整序問題・選択式英作文・会話問題・長文問題まで広い範囲にわたり出題。難易度は標準的だが、

制限時間に対し問題量は若干多め

①出題形式

出題量・出題形式ともに前年度のものをほぼ踏襲している。大問数は、最多で3月試験の7題、最小でR方式の4題である。すべてマーク式で、マーク数は最小で2月試験(前期)2月5日・公募制・R方式の40個、最大で3月試験の46個である。

②出題内容

すべての日程で会話文完成・長文読解問題が出題されている。正誤問題もR方式を除き出題される。「文法語法(五択)」・「整序作文(日本語あり)」・「日本語にあう英文選択問題」の中から、2~3題出題される形式となっている。また、文中の語句の意味を問う「語義選択問題」はR方式でのみ出題され、長文1題は空所補充形式である。

③難易度

いずれの日程の問題も一般受験生が知らないような重箱の隅をつつくような細かい単語や文法知識を問うものはない。内容はいずれも標準的で、高校での学習内容がきちんと定着していれば高得点が狙える。ただし、どの日程も試験時間60分に対し、解答数が40問超えるため、ある程度の速度・素早い判断が求められる。

対策

基本単語・文法知識を身につけ、正確かつ素早い読解力を養成する

「正誤問題」は多くの受験生が苦手意識を持つ出題形式であるが、立正大学の問題は、いずれの日程の問題も、単数複数的一致・能動受動の区別・不定詞の使い方・分詞の区別、接辞詞と前置詞の区別、正しい動詞と前置詞の組み合わせなどいずれも、市販の文法問題集に記載されている文法の基本事項の習得の有無を試す、定番の問題がほとんどであり、そうした問題集を繰り返し演習するのが効果的と言える。

「文法語法問題」は正しいものを選ばせる空所補充の五択式であるが、正誤問題同様、奇をてらうものはなく、動詞の語法、助動詞の使い方、関係詞や接辞詞の用法、可算名詞と不可算名詞の区別・使い分けなど、文法問題の王道ともいえる基本的な文法知識が問われるものばかりであることから、正誤問題同様に市販されている文法問題集等で、文法の基礎知識を固めることが求められる。

また「日本語に合う英文の選択」は英作文のマーク問題とも言えるもので、正解以外の選択肢は、単数・複数的一致がなされていなかったり、可算名詞と不可算名詞に使われる many / much の使い分けが逆であったりといった文法・語法上不適な選択肢を消していけば必ず正しい英文にたどり着けるものばかりで、この点でも正誤問題や文法語法問題と仕組みは変わらないといえる。

「整序問題」も同様で、立正大学の場合、すべての語句を一から並べ替えるのではなく、一部の語句を埋めさせる形式であり、しかも日本語が与えられている形式のものであるから、整序問題というよりも、空所が複数ある文法語法問題ともいえる。

「会話文問題」においても、一般に思われているような特殊な口語表現の知識を問うものは一切見られず、会話の展開・内容からふさわしいものを選ばせる形式が中心である。いふなれば、会話の形式を借りた読解問題であり、長文問題と同様に、選択肢の意味を正確に捉えることが必須となってくる。

最後に「長文読解」であるが、内容的には、共通テストとほぼ同等かむしろ取り組みやすいものがほとんどである。設問形式は、文中の語句の意味を問うもの、内容に関するもの・文中の内容に照らして真偽を問う内容一致問題などが中心である。文中の語句を問う問題には、出題されている語句の中には、通常の単語集に記載されている可能性の低いものも見られるが、これは直接その語句の知識の有無を問うものではなく、文中の内容から推測する力を求められているものといえる。

試験時間に対する問題量から、ある程度のスピードが求められるが、「速読」というのはいい加減に読むことではない。「速読」とは「速く正確に読むこと」である。実際、内容判定問題など、読解問題において正答を導くには、少なくとも本文中の該当箇所を見つけるだけでなく、その該当箇所の英文を正確に理解することが必要になる。また共通テスト同様に難解なテーマの出題は見られないが、だからこそ本文の内容は大体わかるのに、むしろ選択肢の意味を捉えられないことで、内容判定問題で正解を導けないというケースが多々見られる。

結局は、一文単位の理解を正確に行った上で、各文同士だけでなく、各段落との繋がりを追っていくのが、英文読解であり、それをいかに素早くできるかが問われており、そうした観点からの訓練・演習をいかに積めるかがカギになる。

要するに、「見覚えのある単語を拾い、適当に意味をつないで答えを出す」とか「本文を読まずに選択肢だけで答えを出す」などといった安直なテクニックに頼るべきではない。単語・熟語や文法・構文の基礎知識・使い方をうろおぼえではなく、しっかり身につけた上で、英文に取り組むといった当たり前の演習を地道に繰り返し、定着させることが、合格への一番の近道である。